

# 教育の質の点検・評価のための学外の参画に関する報告書

2023年3月22日

副学長(質保証担当)鈴木美佐子

## 1. 北海学園大学の教育活動・学生支援に関するアンケート調査

### (1) 調査概要

- 1) 対象 民間企業・団体・自治体・官公庁 378社にキャリア支援センターから依頼
- 2) 調査期間 2022年12月1日～26日
- 3) 調査内容
  - ①卒業生・学生について ②採用について ③インターンシップについて
  - ④教育について ⑤本学の取組について
- 4) 回答数 138件(回答率 36.5%)

### (2) 調査結果:2022年度 調査結果

## 2. 企業・自治体との意見交換

### (1) 面談日／企業等

面談日:2023年2月20日、21日、27日、3月1日

企業等:民間企業3社、自治体1団体

### (2) 意見交換の内容

- ①入学者選抜
- ②建学理念、ミッション・ビジョン、3ポリシー
- ③カリキュラム・教育方法
- ③学修成果:学修成果に関する情報活用のための方策、学修成果内容、情報提示の方法

### (3) 意見交換における特記事項

#### 1) 教育方法・授業形態

意見交換した4社すべてが共通して言っておられたのは、大教室での講義ではなく、ゼミやワークショップ、PBL や体験型カリキュラムの重要性であった。受け身ではなく、対話や経験の中で自ら問題を発見し、それを周囲に伝え、連携して解決を目指す過程で培われるものこそ、社会が求めている力(社会人基礎力)だとの意見であろう。

こうした意見は、「学修者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について(審議まとめ)」(2023年2月24日、中教審大学分科会)において、「出口における質保証」のために「卒論・卒研やゼミナール教育の充実」の有効性が強調されていたことと重なるように思われる。とはいえ、学位プログラムのあらゆる部分をそうした形態の教育が担えるものではないため、ゼミ

ナールなどの少人数科目をカリキュラムの中でどのように位置づけるのか、それぞれの科目の学修目標をどこに置くのかといった検討に加え、初年次からの系統的カリキュラムの検討など組織的な取り組みが必要であると考え。

## 2) 文章力について

アンケート調査において、「書類を作れない社員が増えているため、しっかり文章を書くという点で、卒論を必修にしてはどうか」との意見を示された企業と意見交換を行ったが、そこで参考になったのは、レポートのあり方についてである。「評価方法としてのレポートは、提出して成績評価されれば終わり、どの点が優れておりどの点がまずかったのか、結論を導く根拠は十分だったのか、構成は適切だったのかなどについて、フィードバックがなされない。リアクションもない。書いたものにコメントをもらい、振り返って見直し・書き直しをさせる機会を与えたほうが、学生は成長するのではないか」とのことであった。

提出物の添削を行っている基礎ゼミは多いのではないかと推測するが、答案の添削やレポートの再提出ということはあまり行われていないように思う。コロナ禍のオンライン授業では双方向性の確保が必要であったため、課題に関するフィードバックが行われたが、対面授業になってもフィードバックや振り返りの機会の提供の継続や、その方法の検討が必要であると思われる。

文章力については他の3社にも伺ったところ、本学卒業生にとくに問題があるというわけではないが、文章力を「大学の学修の中でしっかり身につけてもらいたい」との話であった。くわえて ICT スキルの必要性について質問をした中では、基本的な PC 操作やアプリケーション(word や Excel など) 対応とメールが書ける程度でかまわないとの意見が多かった。指導要領改訂後の初等中等教育(GIGA スクール構想に基づく教育)を受けた生徒が2025年以降に入学してくることもあるため、文部科学省が進める教育 DX やデータサイエンス科目の必須化などについても情報提供と意見交換を行った。

## 3) 学修成果・学修成果に関する情報提示方法について

1) でも記載したが、ゼミやグループワークなどの双方向の学修や、さまざまな経験を通じた問題解決力やコミュニケーション能力が学修の成果として現れることを期待する声をもっとも多く聞かれた。一方、優良可といった学業成績やどのような科目の単位を取得しているかについてはあまり重視しておらず、成績は学生の学修に取り組む姿勢の結果と考えており、卒業要件の充足を確認する程度とする企業が多かった。

また、報告・連絡・相談といった基本的な事柄が実行できる力をつけるためには課外活動や留学、インターンシップ、アルバイトなどの学業以外に力を入れていた活動や、外部のアセスメントテスト結果などもわかると参考になるとの意見も見られた。

## 4) その他

ある企業は、面接時に「失敗の経験」を尋ねるとのことであった。レポートの添削や書き直しとも

関係するかもしれないが、失敗や誤りをきちんと認識させ、問題を把握させ、修正や解決を促すというプロセスを意識した教育は一考に値すると考える。

また、初年次からの「キャリア教育」の必要性については、どの企業も強調されていた。とくに、自分の将来について考え意識させるようなカリキュラムや仕組みの必要性が述べられていた印象である。

自治体との意見交換の中で、1)に示したような体験型カリキュラムやフィールドワークが、学生の力を培うという話が出た際に、地域連携授業について尋ねたところ、すでに連携授業を行っている大学があるとのことであった。今後さまざまな新しい試みがなされることが期待される地域でもあることから、自治体との多様な形の連携を検討する必要があると感じた。